

描き始める前に 1

鉛筆の削り方



鉛筆は描（書）く内容によって削り方も異なってきます。文字や図面を書く際には、主に芯先を使いますので鉛筆削り器などで先を尖らせることが常です。しかし、デッサンにおいては芯先だけでなく芯の側面を使って描くことが必要になります。芯を長めに出して側面を使うことで、広い面積に調子をつけやすくするのです。そのため鉛筆けずり器を使用せず、カッターナイフでデッサンしやすいように削ることになります。ここではデッサンのための鉛筆の削り方を図解していますので、参考にしながら削ってみてください。

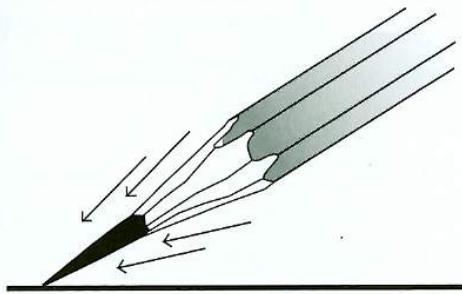
良い削り方



芯の長さ

削り出しの長さ

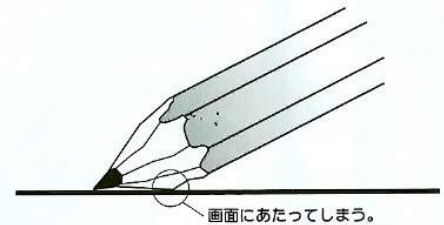
芯も削り出し部分も長く削ってあることで、力が分散して折れにくい。寝かせても使いやすい。



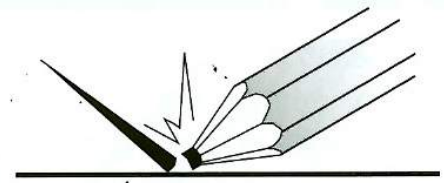
悪い削り方



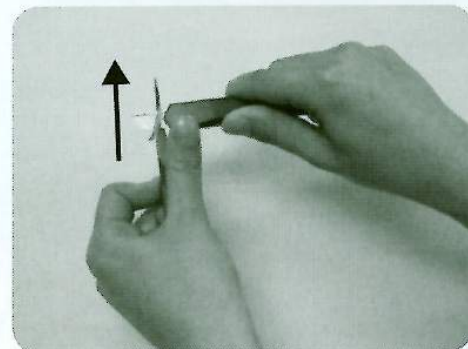
芯が短く寝かせて調子をつけることが難しい。また削り出しの部分が短いと画面に当たり傷をつけることがある。



削り出した木の部分が短く芯が長過ぎる。この場合、力が一点に集中して折れやすくなります。



カッターナイフの背に親指を添えて、前に押し出すようにして削ります。鉛筆の六つの角をひとつひとつ落としながら芯を出していきます。鉛筆の芯は種類によって硬さや太さが違うので必要な力加減は異なりますが、何回か削るうちに慣れてきます。仕上げはサンドペーパーや芯研器などを用いるとシャープに尖らせることができます。



鉛筆を使い分ける

二次元の画用紙上に三次元の空間を表現するためには、鉛筆をうまく使い分けられるようになることが絶対に必要です。モチーフの形態、量、光の当たり具合、固有色、質、距離、空間など様々な違いを描きわけるということは、それなりの鉛筆の使い方を考えていかなければならないということです。鉛筆を立てて描いた時と寝かせて描いた時の違いや、硬い鉛筆と軟らかい鉛筆の違い、筆圧、

タッチ、重ね具合、画用紙の目のつぶれ具合等といった違いを考え、試しながら鉛筆を使うと、表現の幅が広がります。そして、それらをマスターすれば、多くの物の質感の違いや関係を描き分けることが自然にできるようになるでしょう。少しずつ試しながら自分なりの経験を重ね、レベルアップしていきましょう。

種類	6H 5H 4H 3H 2H H F HB B 2B 3B 4B 5B 6B
硬さ	硬い ←————→ 軟らかい
彩度	低彩度 ←————→ 中彩度 ←————→ 高彩度

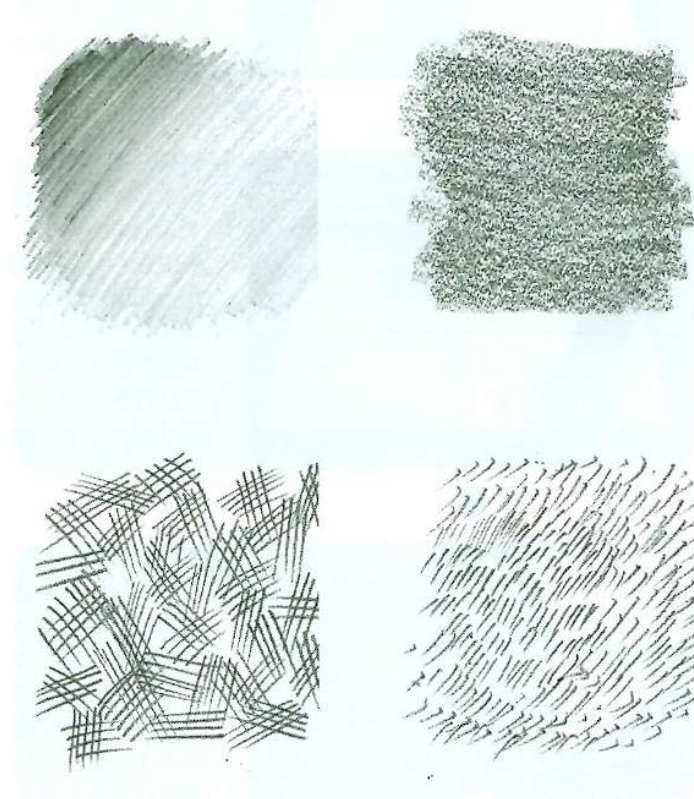
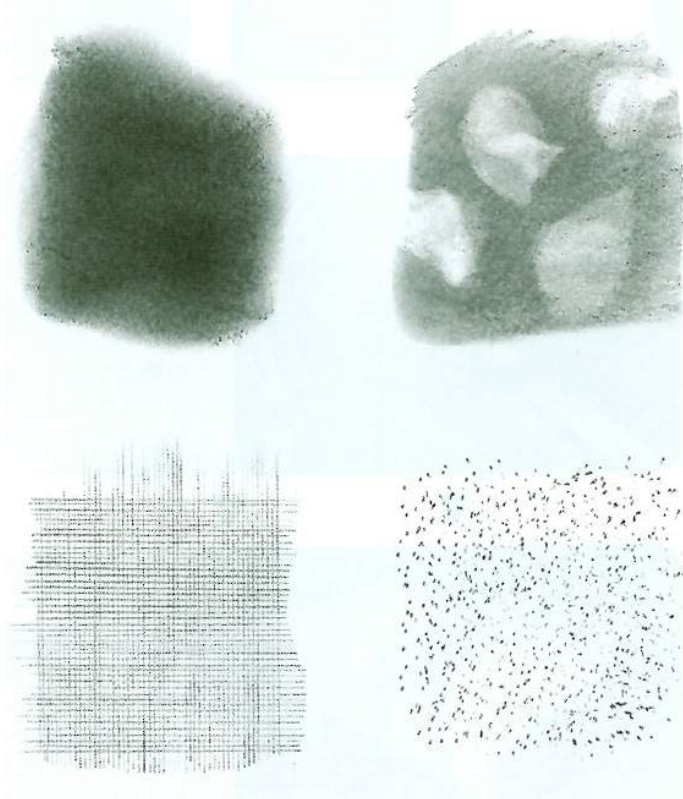
鉛筆によるタッチ

●タッチのバリエーション

ごく僅かな例ですが、いくつかの鉛筆のタッチの例を挙げてみます。こういったタッチは、モチーフ（対象物）から受けたイメージをもとに描き手が工夫して生み出していくものです。その工夫こそが豊かな表現につながっていくのです。一つのタッチだけでなく、いくつかを組

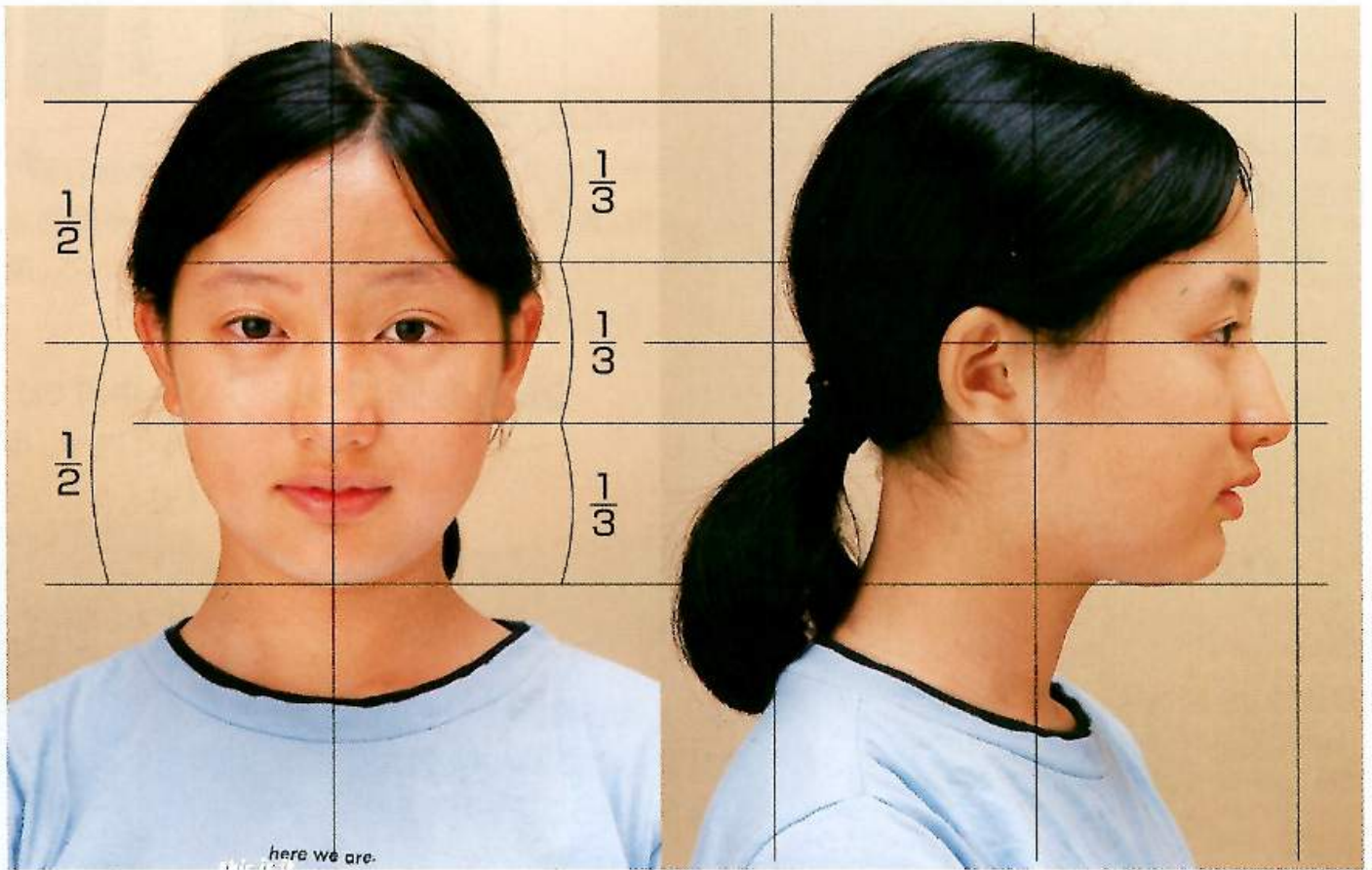
み合わせたり、何度も描いたり消したりを繰り返したりと試行錯誤を積み重ねながら質に迫ってください。

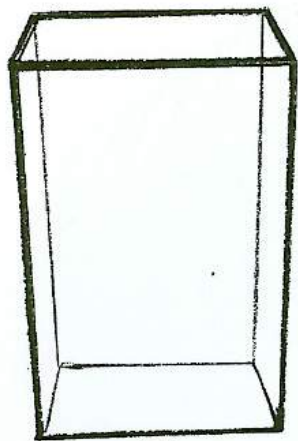
★決まった描き方はありません！
描き方は描き手の数だけあるのです！



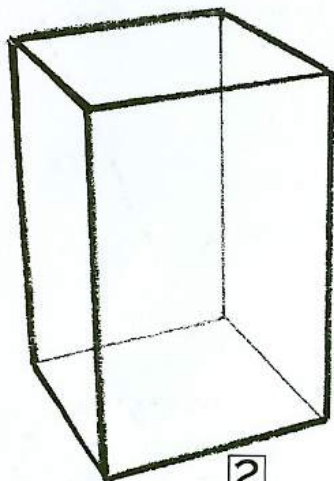
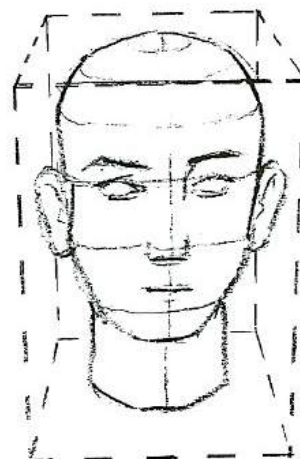
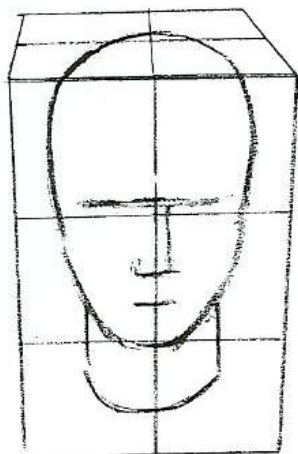
■頭部の大きさ、目や鼻の位置を把握する

顔の正中線を基準として見よう。目は顔面の約 $\frac{1}{2}$ 、まゆ毛、あご、鼻先はそれぞれ約 $\frac{1}{3}$ の位置になる。横顔の奥行きは思ったよりあり、耳の位置はかなり後ろにある。

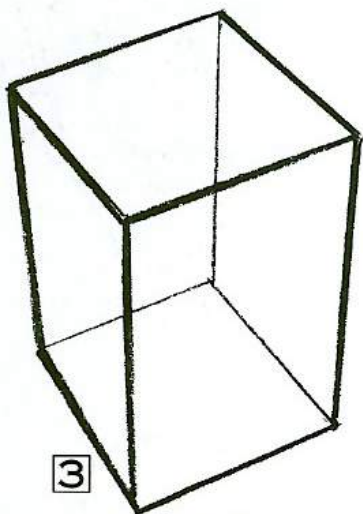
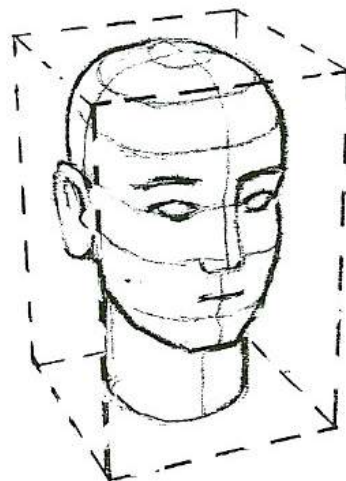
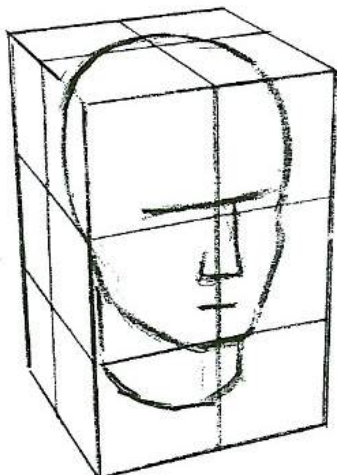




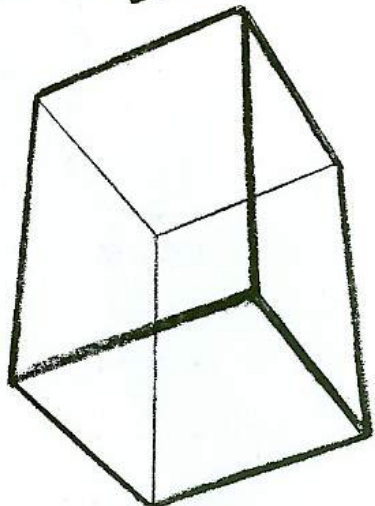
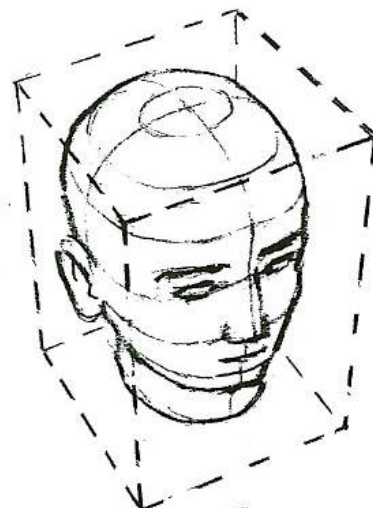
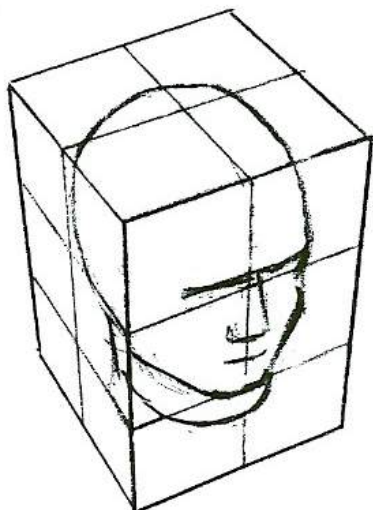
1



2



3



4

